隣のりんごはよくりんご

空空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隣のりんごはよくりんご

【Ｎコード】
Ｎ４５８３Ｏ

【作者名】
空空

【あらすじ】
三題噺「人喰いりんご」「人工衛星」「梅雨」で制作した話し。ぶっちゃけどの単語もほとんど入っていない。

以下は釣りあらすじです。
人喰いりんごを求めて周回軌道に乗ったゆきちーとなっちは青森は津軽のさびれた村を東奔西走の大活躍を見せる。だがその梅雨の日に現れたのはなんと人工衛星ひまわりだった。台頭するりんご。逃げまどういがぐり達。日本全土を東西に分ける冒険活劇が今始まる

「隣の柿は良く客喰う柿だ、って言うじゃない？」

すべてはその一言から始まった。

二人だけの小さな教室。お行儀悪く机に腰掛けた雪ちーが、あごに手を当てて納得したように言う。

「いや、言わないんじゃないかなぁ」

「これって一種のホラーだと思うのよね」

ふんふんと鼻息を荒くして言う雪ちーは昔から人の話を聞かない。慣れているので僕はもう気にならないけれど。

「いい？　例えばこんな感じよ。あるところに大きな柿の木があるの。森の奥にある柿の木は、道に迷った人間を、その柿の甘い匂いで引き付ける。もちろん道に迷った人は何時間も森の中を歩き続けているわけだからお腹がすいていて、見つけた柿の木に近寄るわ。そして柿は、その人の頭めがけて鋭くとがったいがいがを、」

「ちょっと待ってよ雪ちー。今、柿の話をしてるんでしょ。なんでいがいがなのさ。とげがあるのは栗の実だよ」

そう注意すると、雪ちーは少し考えるようなしぐさを見せてから、わずかに頬を赤らめて咳払いした。

「今のはなっちが気づくかどうか試したの」

雪ちーは昔から負けず嫌いだ。もう慣れているので、僕は気にならないけれど。

「そんなことより話の続きよ。そう、柿の木は、その人の頭にまだ熟れていない実を落とすの。あまりの衝撃に倒れ伏した人はそのまま死に絶え、憐れ柿の木の養分に！」

雪ちーは目を見開いて全身でその恐怖を体現している。雪ちーは昔からオーバーなのだ。

さて、雪ちーがこういう感じになる時は、たいてい次に言い出すことは予測できてしまう。僕は一息ついてから、落ち着いた雪ちーに聞いてみた。

「それじゃぁ、次のテーマはそれでいくの？」

「モチロンロン！」

元気な一言とともに、本日午後七時に校門前集合が決定された。

「よし、みんな集まったわね！」

みんなという言葉には突っ込まないでおく。例えここにいるのが僕と雪ちーだけでも。

「それじゃあ第三十四回、八巻村梅雨中学校村おこし部が行く、人食いアップル探索ツアー始め」

「雪ちー雪ちー」

「あによ」

「人食いアップルって……昼に言ってたのは柿じゃなかったっけ？」

僕の一言に、雪ちーはため息をついてやれやれといったように首を振った。

「まったく……なっちはダメダメねぇ。いい？　ここは天下の青森よ！　日本本州最北端、なにはなくともりんごの産地、津軽海峡冬景色！　村おこしに柿なんて使えるわけないでしょ」

拳を天高く振り上げる雪ちーに、僕はなんとなく拍手を返した。ご機嫌になった雪ちーはそのまま学校の横を抜けて、裏山へと進んでいく。その先にはちょっとした森があって、その先の平地に雪ちーのお父さんが経営するリンゴ園がある。もちろん道路からりんご園に通じる道もあったけど、雪ちーがこっちの方が雰囲気が出るからと言って、わざわざ森を通ることが決定したのだ。

空はよく晴れていて、満天の星が見えた。こういう時は田舎の村の方がいいのかなぁと思ったりする。だけどそれでも、僕たちは村おこし部なのだ。

山の奥の小さな八巻村で、過疎というたった二文字の言葉が僕たちから友達を奪っていった。もう梅雨（うめさめ）中学校の生徒は僕と雪ちー二人だけだ。

だから僕たちは村おこし部を作った。

誰か人を呼べるような話をつくって、外に向かって発信するのだ。

それが話題になれば、きっとこの村も有名になって、人が増えるかもしれない。もっともその試みはまだ一回も成功していないけれど。

暗い斜面に足を取られながら、僕と雪ちーは森の中に入っていく。

「ねぇ雪ちー」

「あによ」

「今回はどんな話にするの？」

村おこし部では、なんとなく題材を探しては、話につながりそうな村の場所を巡って、いろいろな話をつくる。最近は夏ということもあって、怪談話が続いていた。

「簡単簡単。津軽名産のりんごたちが実は人食いりんごだったと知れば、それを一目見ようと北はロシアから南は南極までいろんな人たちが来るはずよ。誰もが震えあがる怪談話をつくって見せるの。そのためには、やっぱり実地でいろいろ見ないとね」

そう言って雪ちーはずんずん奥へと進んでいく。不意に辺りが暗くなって顔を上げると月が雲に隠れていた。

「でもどうせ怪談話をつくるなら、もっとじめじめした梅雨の季節が良かったな。その方が、なんか生臭い風とか吹いてそうだし」

「梅雨じゃまだまだりんごの実は小さいよ、雪ちー」

そんな事を話しながら進んでいくと、雪ちーが不意に足をとめた。思わず前からぶつかりそうになる。慌てて足を動かしてつんのめっ

た僕は、そのまましりもちをついてしまった。思わず見上げた空は、まだ暗いままだ。

「どうしたの？　雪ちー」

「出口が……ないの」

言われて前を見る。

そこにあるのは今までと変わらない景色。杉の木がどこまでも生えている。出口と言われてもピンとこないけれど、確かにそろそろおじさんのりんご園に入っていてもおかしくないかもしれない。

「……気のせいじゃなくて？」

「うーん。かもしれないけど、だけどなんか、へん」

いつも元気を体中で表している雪ちーが萎れたように呟くので、僕の方も不安になってしまう。

「とにかく歩こ。登り続けてたらりんご園につくはずだから」

そうして僕たちは歩き始めた。

だけど三十分進み続けても、りんご園のフェンスは見えてこなかった。

「なんで着かないの？」

雪ちーが少し泣きそうな声を出す。僕もお腹が痛くなるくらい不安だった。歩いても歩いても、同じように生えている杉の木が、何本も何本も現れるだけ。途中で道路があるはずの右の方に歩いたり、来た道を引き返したりしたけれど、ずっと同じ景色が続くので、僕も雪ちーもすっかり打ちのめされてしまった。

長くたって一時間くらいの散歩だと思っていたから、荷物なんて持ってきてない。もちろん食べ物も飲み物もなくて、夏の暑さの中歩き続けたせいか、喉もからからで汗びっしょりになってしまった。

ただでさえ暗い森の中なのに、隠れた月が出てこないから、もう自分の足元も見にくい。僕と雪ちーは離ればなれにならないように、くっつきながらまた歩き始めた。

「ねぇ、なんだか甘い匂いがしない？」

雪ちーが鼻をひくひくさせながら、足を止めて言った。僕も真似して鼻をひくひくやってみる。確かにほんのりと甘い匂いがした。

「こっち」

雪ちーが僕の手をひっぱって歩き始めた。

どこまでも続くと思えた杉の木が、ふいに開けたその先に一本の木があった。大きな木だった。僕は思わず、前に国語の教科書で読んだモチモチの木の話を思い出した。

だけどついているのはモチモチの実じゃなくて、もっと大きくて、赤い実だった。

もっと言えば、りんごの木の実だった。

今まで隠れていた月がようやく顔を出したみたいで、辺りが急に明るくなった。月明かりに照らされたりんごは、ぷっくり膨れた血みたいでなんだか不気味だった。

甘い匂いが辺り一面に漂っている。

思わず喉がごくりと鳴って、隣を見るとふらふらと雪ちーが歩き始めていた。りんごの木の方へ、まるで酔っ払いみたいな足取りで。

「雪ちー？」

「……おいしそう」

呼びかけると、雪ちーはたったそれだけ答えた。答えたというより、ただ思ったことをつぶやいたみたいだった。りんごの木までもうあと十歩もない。

なにかが頭の中に引っかかる。

『隣の柿は良く客喰う柿だ、って言うじゃない？』

昼の会話を思い出した。偶然か何なのか、雪ちーの話した怪談話。人食い柿の恐怖が頭の中でチカチカと流れた。

「だめ、雪ちー！」

僕は思わず走り出した。だけど雪ちーはりんごの木まで、もう二、三歩というところまで進んでいて、視界の上の方に赤い物体がふっと映った。

間に合わないと思った。このままじゃ、雪ちーがりんごに食べられちゃう。

届けと思って手を伸ばして、僕は視界が暗くなるのに気づいた。

顔を上げると視界一面に赤が広がっていて、がんという衝撃を受けた。視界いっぱいに星が散らばって――

朝、僕と雪ちーはりんご園で倒れているところを発見された。辺りにりんごなんて落ちてなかったけど、僕たちの頭には大きなこぶが残っていた。

どうせ転んで二人して頭をぶつけあったんだろうと、おじさんに笑われた。

僕たちは頭をさすりながら、そのまま学校へ向かったのだった。

昼休みまで、雪ちーはじっと黙っていて、僕はちょっとした不安を覚え始めていた。こういう雪ちーは、きっと何かとんでもないことを言い始める。

「ねぇ、なっち」

案の定、昼休みにおじさんからもらったりんごをかじる横で、お行儀悪く机の上に腰掛けた雪ちーがぽんと右手をたたいた。

「昨日ね、りんごの木に近寄ってさ。あたしとなっち、倒れたじゃない？　あの時私、星を見たのよね」

まるで何かに納得したように、雪ちーがあごに手を添えてふむふむとやる。

「いや、僕もチカチカと星が舞うのを見たけれど、あれは頭をぶつけただけ、」

「そう、昨日のあれは、きっと星が落ちてきたのよ。お星さまよ、シリウスよ、人工衛星ひまわりよ！」

僕の言うことを無視して、雪ちーは目を見開いて全身で驚愕を表現する。

雪ちーは昔から人の言うことを聞かないし、オーバーリアクションだ。僕はもう慣れているけれど。

「あの星を捕まえれば、きっと大発見。村は有名になって、あたしたち村おこし部の大勝利なの！」

そうして今日の夜七時、再び学校の校門前集合が言い渡された。

もう雪ちーは人食いりんごの怪談なんてすっかり忘れていた。

雪ちーは昔から飽きやすい。

僕はもう慣れているけれど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4583o/

隣のりんごはよくりんご

2010年10月23日02時46分発行